「国立青島大学」という物語
—— 彼女が李雲鶴だった頃 ——

杉　村　安幾子

1. 序

「紅い瓦に緑の木々、紺碧の海に青い空」。山東省青島（チンタオ）を訪れる者の耳目に必ず触れる、青島を形容するこの一文は、康有為（Kang Youwei、1857-1927）が言ったとされている[1]。実の所、康有為の言かどうかについては出典が明らかでなく、疑義もあるようだが、青島の形容としては簡にして要を得たものであるため広く人口に膾炙している。

青島は中国が世界に誇るドメスティックブランドである青島ビールと、異国情緒溢れるビーチリゾートゆえに知名度の高い都市であるが、その知名度の高さとは裏腹に都市としての歴史は長くない。ドイツが膠州湾を当時の清朝政府から租借した 1898 年 3 月、初めて「青島」の名が中国史に浮上してきたのである。厳密に言えば、青島郊外の嶗山の風光が唐代の詩や明代の随筆に称えられたり[2]、明代には膠州湾の倭寇対策として、青島に浮山所という要塞が設置されたりなど[3]、青島に関する記載を史書に見出せない訳ではないが、ドイツの「発見」まで青島は辺鄙な海浜漁村に過ぎなかったと言って良い[4]。

1897 年から 1914 年までのドイツ[5]、1914 年から 1922 年及び 1937 年から 1945 年までの日本による租借という名の植民地支配を経て、当初は湾に浮かぶ小島の名であった青島は、近代都市へと貌を変えていった。青島が当時の中国において、インフラや医療・衛生面の整備、商工業施設や初中等学校の設立、メディア状況などの面で、都市として破格に優れていたことは、青島守備軍民政署編『青嶋要覧』（1921）と同民政署の事務官であった泉對信之助

著『青島二年』（1922）に詳しい[6]。ドイツによる青島の割譲や植民地支配は無論、帝国主義の謗りを免れ得まいが、ドイツの都市建設は現代の都市計画の見地からも優れたものであり、後続宗主国であった日本の絶賛を受けるほどであった。

しかし、都市としての歴史の短さは、即ち端的に文学的にもほぼ空白であったことを意味する。青島が中国文学史上一気に名を挙げ且つ留めることになったのは、1930 年の国立青島大学の創立が契機であった。青島大学の初代校長であった楊振声（Yang Zhensheng、1890-1956）[7]は建学の精神に科学と民主を掲げ、留学帰りの著名な文人・学者を招聘して教授陣に据えた。1930 年はそれまで毫も注目されてこなかった青島という都市が、文化空間として中国史に躍り出た瞬間であった。上述の康有為の言とされる形容も、単に美しい風景としてではなく、文化空間でもあった近代都市を表象するものとしても機能したに違いない。

1931 年春、1 人の 17 歳の少女がこの青島大学に現れる。山東省諸城の出身で、名を李雲鶴という長身で眼の大きい美しい少女であった。彼女は曾ての恩師であり、当時青島大学の教務長をしていた趙太侔（Zhao Taimou、1889-1968）を頼り、青島大学の図書館事務員の職を得る。午前中は大学で授業を聴講し午後は図書館で働くという生活の中で、李雲鶴は多くの文人の知遇を得、エリート青年との恋愛も経験する。彼女の青島でのこうした経験は結果的に、彼女自身と国家としての中国の運命を文字通り大きく変えることになった。この少女こそ後に文化大革命を主導し、呂后や西太后と並んで中国史上突出した「悪女」と見なされるようになった毛沢東第四夫人江青（Jiang Qing、1914-1991）である。

本稿では少女李雲鶴を通して、文化都市青島と国立青島大学における文学状況を概観する。あくまで結果論に過ぎないにしても、江青が文革以前にも中国現代文学史に深く密接に関わっていたことが明らかになるはずである。青島での様々な文学的事象が、後の江青の暴虐としか呼びようのない一連の所業につながっていく過程は、憤りを通り越して何故そこまでという純粋な疑問を呼ぶが、ひとまずそのことの是非は問わない。江青が藍蘋という芸名

で女優として活躍する以前、ただの李雲鶴だった頃を以下に追っていこう。

2. 国立青島大学の設立

青島の実質的支配者であったドイツ総督府は1908年､初中等学校の設立に次いで、より高次の教育レベルを求めて大学の創立を企図した。古い兵営を利用して寄宿舎や校舎とし、1909年10月青島特別高等専門学堂、通称徳華大学が開校する。経営は清国・ドイツ両政府の共同により、中国初の中外合資大学であった。設立学科は法政、医学、工学、農林の4分野、卒業生は中国の他大学卒業生と同等の資格を得られた。授業科目には実用的なものが多く設置され、実験室や実習場など教学設備も整い、卒業後の進路も安定していたため、徳華大学は年を追うごとに入学希望者が増加していく。卒業生は西洋医学、法律、機械、電気工学、採鉱、林業など、それまでの中国では人材が不足していた方面で即戦力として世に供給されていき、清朝政府もそれを歓迎していた。青島の近代教育はこの徳華大学を以て開創とする。しかし、1914年第一次世界大戦が勃発。徳華大学は学生、教職員、教学設備もろとも上海へ移転し、上海同済大学に吸収合併された。[8]

その後、ドイツの撤退によって青島の統治権が日本に移り、青島守備軍民政署は青島商科大学の設立を計画する。元ドイツ陸軍庁舎を校舎に利用し、運営費は日華実業協会が負担するなど、開校に向けた具体的な動きはあったものの、1922年に青島が中国に返還されたことで青島商科大学の設立は実現されずに終わった。

徳華大学の上海移転や青島商科大学の企画倒れによって、青島に高等教育機関がないまま10年近くが過ぎた1924年、膠澳商埠総督に就任した高恩洪（Gao Enhong、1875-1928）は私立青島大学創立に向けて私立青島大学理事会を組織する。理事会には梁啓超・蔡元培・黄炎培が名誉理事として名を連ねていた。同年9月、商科と工科の2学科が開設された私立青島大学が創立、校長は膠澳商埠総督との兼任の形で高恩洪が担当した。中国人学生だけでなく、日本や朝鮮、マレーシアからの学生もおり、教員にはアメリカや日本へ

の留学経験者も多く含まれており、1926 年には鉄道管理科も増設されたが、そのわずか 2 年後の 1928 年に廃校の憂き目を見る。実は 24 年の第二次直奉戦争における直隷派の敗走を受け、自身も直隷派であった高恩洪が政界を引退、大学経営からも手を引いていた。後任の宋伝典（Song Chuandian、1875-1930）が奔走するも、国内の政治的混乱の中、学生と教職員の青島大学離れを食い止めることは出来ず、25 年には翌年の学生募集を停止していたのであった。

1929 年 6 月 4 日、南京国民政府行政院第 26 回会議において「国立青島大学創建議案」が通過し、教育部は省立山東大学と私立青島大学を合併させ国立青島大学とした。続いて 6 月 12 日、国立青島大学創立準備委員会が組織される。メンバーは以下の 9 人であった。

蔡元培（Cai Yuanpei、1868-1940）
…浙江省出身、ベルリン大学・ライプチヒ大学留学、元北京大学校長、国立中央研究院院長・国民党中央監察院院長

王近信（Wang Jinxin、生没年不詳）
…山東省出身（？）、アメリカ留学、山東省教育庁秘書主任

彭百川（Peng Baichuan、1896-1954）
…江西省出身、北京大学卒、スタンフォード大学・コロンビア大学留学、山東省教育庁科長

趙太侔
…山東省出身、北京大学卒、コロンビア大学留学、山東実験劇院院長

何思源（He Siyuan、1896-1982）
…山東省出身、北京大学卒、シカゴ大学・セントルイス大学・ベルリン大学・パリ大学留学、国民党山東省政府委員兼教育庁庁長

袁家普（Yuan Jiapu、1873-1933）
…湖南省出身、早稲田大学留学、山東省財政庁庁長

傅斯年（Fu Sinian、1896-1950）
…山東省出身、北京大学卒、ロンドン大学・ベルリン大学留学、中央研究院歴史語言研究所所長・北京大学教授

楊振声

…山東省出身、北京大学卒、コロンビア大学・ハーバード大学留学、清華大学文学院院長

杜光塤（Du Guangxun、1901-1975）

…山東省出身、北京大学予科卒、コロンビア大学留学、教育部高等教育司司長（不詳）

上記の一覧から明確に指摘できるのは、山東省出身者と北京大学の卒業生、留学先が米国コロンビア大学であった者が多いという 3 点である。中国人は外国では同郷を頼って生活することが多いため、同郷人が同一大学に留学するのは珍しいことではなく、寧ろ当然の流れでもある。出身地閥と学閥が重層的に絡み合った人選と言えるだろう。

この創立準備委員会で校舎の拡充、教職員の組織、予算や経費、院系（学部学科）設置などについて話し合われる中、7 月に楊振声が校長に内定した。9 月 16 日、国立青島大学が開学。当時、北京の清華大学文学院院長でもあった楊振声は、授業や会議と平行して青島大学開学の準備に携わっており、多忙を極めていた。1930 年 4 月 28 日、南京国民政府により正式に楊振声の国立青島大学校長就任が発令された。文学院外文系主任兼図書館長であった梁実秋（Liang Shiqiu、1903-1987）は次のように回想している。「楊金甫（振声）は北京大学出身で、当時、教育部には知り合いが少なからずいた。同時に彼は山東出身でもあり、教育庁の人とも関係があった。ゆえに彼が校長になったのは適当である。しかも彼は性格が温和で、口数少なく度量が広い。ゆえに教育部とも教育庁ともうまくやれ、最初は互いにいざこざがなくいられたのだ」[9]。

1930 年 7 月、青島・済南・北平の 3 箇所に分けて学生募集がなされ、入学試験が行われた。入学資格は、1 年次入学希望者が日本の中学相当の高級中学の卒業生或いは大学予科卒業生、2 年次入学希望者が大学本科を 1 年以上在籍した者とし、第一期生の対象専攻は文学院（中国文学系・外国文学系・教育学系）、理学院（数学系・物理学系・化学系・生物学系）の 2 学院 7 系であった。教育学系は翌年には教育学院（教育行政系・郷村教育系）に拡充され、3 学院 8 系となる。

9 月 19 日、国立青島大学が正式に成立。翌日の 9 月 20 日午前 9 時、大学内の大礼堂で開学の式典が催され、第一期入学生と 2 年次編入生計 170 余人及び校長楊振声、中央研究院院長蔡元培、教務長張道藩（Zhang Daofan、1897-1968）、山東省党部代表何思源らが出席した。また第一期入学生には、後に詩人として名を馳せる臧克家（Zang Kejia、1905-2004）がいた。

翌年の『国立青島大学週刊』創刊号には、楊振声による開学の挨拶「校長報告」が掲載された。楊振声は経費不足を示しつつも、図書館や化学設備及び実験室、体育施設の充実を掲げ、海洋学の創設を目指し、「このようにすれば、青島大学は海洋生物学研究の中心となるであろう」と予言した[10]。青島が膠州湾に面しているという地の利を活かした海洋学への着眼は、現在の国立中国海洋大学へとつながっていく。楊振声は教育の重要性を諄々と説いて「校長報告」を締め括っている。

また、楊振声は自らの出身大学である北京大学を標榜し、「兼容并包（多くの事柄を包括・包容する）、学術自由」と「科学、民主」を大学運営の中心に据え、当時の著名な文人・学者を教授陣として招聘した。例えば、シカゴ美術学院やコロラド大学で学び、詩集『紅燭』（1923）で詩人として注目を集めていた聞一多（Wen Yiduo、1899-1946）は文学院院長兼中文系主任、ハーバード大学で学んだ梁実秋は文学院外文系主任兼図書館長、趙太侔は教務長兼中文系教授、新進作家として活躍中であった沈従文（Shen Congwen、1902-1988）とウィスコンシン大学で学んだ方令孺（Fang Lingru、1897-1976）は文学院中文系講師、若き詩人陳夢家（Chen Mengjia、1911-1966）は文学院中文系助教、コロンビア大学で教育学の博士号を取得した教育学者黄敬思（Huang Jingsi、1897-1982）は教育学院院長兼教育行政系主任、シカゴ大学で学んだ数学者黄際遇（Huang Jiyu、1885-1945）は理学院院長兼数学系主任、ベルリン大学で学んだインドネシア華僑湯騰漢（Tang Tenghan、1900-1988）は化学系主任、フランスとスイスで学んだ農業昆虫学者曾省（Zeng Sheng、1899-1968）は生物学系主任であった。その他、既述の蔡元培や哲学者馮友蘭（Feng Youlan、1895-1990）、歴史学者でもあり民俗学者でもあった顧頡剛（Gu Jiegang、1893-1980）らが講演に招かれた。こうした綺羅星の如き教員の布陣は、設立

したばかりの青島大学の教育・研究水準を一気に全国レベルへと引き上げたのみならず、青島を文学・文化的一大陣地に押し上げたのであった。[11]

3. 青島大学の日々

江青は 1914 年 3 月、山東省諸城の貧しい工人の家庭に生まれた。生まれ月が 3 月であるのは確かなようだが、出生日については本人が語っておらず、或いは本人も把握していなかったかもしれない。実は、そもそも生年についても諸説あり、出身地も諸城ではなく、同じ山東省の益都であるとの説もある。幼名は李進或いは欒淑蒙であったと言われているが、少女時代には母親の姓であった李を名乗るようになる。

このように、江青のプロフィールに関しては不明な点が多く、また数種ある江青評伝も江青に対する著者の評価や好悪の感が反映され過ぎており、史実と主観の違いを見分けるのが困難でもある。今後の研究の成果に俟ちたいが、とりあえず本稿においては自伝に拠り、他史料で確認しつつ、彼女の青島での日々を見ていくことにする[12]。自伝こそ最も根拠には出来ない資料ではないかとの指摘もあるだろうが、少女李雲鶴の眼に青島大学がどのように映っていたかの参考にはなるだろう。なお、毛沢東夫人江青の「誕生」以前の時期であるため、以下青島大学での江青については「李雲鶴」の名を用い、後の「江青」とは区別する。

李雲鶴は幼い時、貧しい生活の中で暴力を振るう父親の許から母親と共に逃げ出している。母親が没落地主の家で職を得たため、李雲鶴も小学校に通うことが出来た。1927 年、母と共に天津にいる姉の許に身を寄せ、学業を続けることを希望したが、天津の学校の学費が高かったために叶わずに終わる。李雲鶴の正規の学業は結局、小学校が最後となる。

1929 年、母・姉夫婦と山東の省都である済南へ移り、叔父の家に寄寓する。そこで李雲鶴は山東省立実験劇院に入学した。正規の入学資格はなかったが、女子学生が少なかったために入学することが出来たのである。1928 年に創立したばかりの実験劇院は、教育庁直属であったため寄宿制で学費・生活費が

免除されており、李雲鶴はそこで新劇・古典劇・古典音楽を学んだ。この頃、一回目の結婚をしたが、すぐに離婚。西北軍閥の韓復榘（Han Fuju、1890-1930）が山東省政府主席になったことにより、実験劇院はわずか 1 年で閉鎖に追い込まれた。実験劇院の教員と学生は劇団を組織し北京へ向かい、李雲鶴もそれに参加するが、北京での生活は相当苦しかったようである。

李雲鶴は北京での生活に見切りをつけ、青島を訪れた。

> 私は多分 1931 年の初春に青島に行ったと思う。青島は寒く、湿っぽかった。冷たい霧といかにも港らしい潮の香りのする海風を大変珍しく感じた。以前師事していた趙という先生が紹介してくれて青島へ行ったのだ。彼は私の隣人でもあった。彼は曾て済南実験劇院で監督をしていたのだ。今は青島大学のある学院の院長で、同時に又文学系の教授でもあった。
>
> そういった関係もあったので、彼は私のために青島大学の聴講生の手続きをしてくれた。彼は将来、青島大学に演劇系を設立するのだと語っており、私に路銀を貸してもくれた。私は元々青島へ行きたくはなく、家に戻って女工になりたいと簡単に考えていた。後に同級生や友人が私に行くように勧めたので行ったのだ。私は海辺の町で生まれ育ったのだが、青島で初めて海を見て跳び上がらんばかりに嬉しかった。[13]

「済南実験劇院で監督をしていた」「趙という先生」が趙太侔である。趙太侔は山東省立実験劇院院長であったが、2 で見たように 1929 年から青島大学創立準備委員会の委員でもあり、大学創立後は教務長兼中文系教授を務めていた。江青は「趙という先生が紹介してくれて」と述べているが、別の見方もある。校長楊振声の息子楊起は「趙先生が青島大学に来ると、李雲鶴が済南から青島まで趙先生を頼って来た。父は当時、趙先生と一緒に暮らしていたのだが、李雲鶴もしょっちゅう我が家を訪問していた」[14]と回想している。

李雲鶴は趙太侔の紹介で青島大学の図書館員になった。

> 私は大学の教職員の隊伍に加わり、図書館の職員になった。仕事は図書カード

を書くことであった。同時に大学で授業の聴講を続けていた。毎月、私は 30 元稼いだが、母親に 10 元仕送りをしていた。青島での生活費はひどく高く、手元に残った 20 元では出費に追いつかなかった。

『中華民国二十年度　国立青島大学一覧』を繰ると、「学生姓名録」の「旁聴生（聴講生）」欄の筆頭に李雲鶴の名を見出すことができる。学籍番号・姓名・性別・本籍・連絡先の順で「A 一・李雲鶴・女・山東諸城・済南按擦司街七十五号」とある。名簿で隣に名を連ねている「A 二・沈岳萌・女・湖南鳳凰・湖南鳳凰県西門上」とは、沈従文の妹であった。校長楊振声の要請を受けて 1931 年 8 月に青島大学に着任した沈従文は、妹を伴っていたのである。

月給 30 元に関しては、江青の記憶は正しい。『国立青島大学　中華民国二十一年度教職員録』に拠ると、当時の校長趙太侔が 520 元、教務長であった杜光塤や図書館長であった梁実秋は 400 元、講師であった沈従文は 150 元、そして職務「書記」で年齢「二十五」の李雲鶴は 30 元であった。この「書記」に関しては詳しい記述はないが、他に「図書館事務員」「図書館助理員」という職名があり、それらの職にあった者達の月給がそれぞれ 60 元・50 元であったことに鑑みると、李雲鶴はアルバイトかパートタイマーであったのではないかと推察される。また、李雲鶴の生年が不詳とは言え、「二十五」という年齢は明らかに間違っている。単純な誤記でなければ、虚偽申告されていたということであろう。

李雲鶴の青島大学での授業の聴講は以下のようであった。

> 青島大学における私の文学の先生の第一は聞一多である。唐詩、小説、戯劇、それに中国文学史を教えてくれた。もう一人は楊振声で、当時青島大学の校長だった。小説『玉君』の作者である。それから方令孺という女性講師、彼らは皆アメリカ留学組だった。
>
> 楊振声は主にどうやって創作するかを教えてくれた。彼の授業で、私は初めて短篇小説を書いた。先生は私のその小説を非常に気に入り、褒めてくれ、まるで謝冰心のようで、クラスで 1 番だと言った。彼の賞賛を聞いて、私は恥ずかしく

感じた。しかし先生は、李さん、君の描いた強盗は礼儀正し過ぎるよ、強盗が罵る時には、「コン畜生」しか言わないだろうと批判もした。これは今でも使う無駄のない簡潔な言葉で、強盗にとっては荒っぽさが足りない。彼のこうした批評を受けて、私はそれっきり彼の授業には行かなかった。

その時期、私が主にしていたのは戯曲を書くことだった。多分、1931 年の後半だったと思うが、タイトルは『誰の罪か』だった。若い革命者と彼の病気がちの母親が、互いに助け合って生きている様を描いたものだ。

正規の学生ではない聴講生とはいえ、授業の聴講にはかなり熱心であったことがわかる。上記の引用にある聞一多、楊振声は当時、相当高名であった。また、沈従文については次のように回想している。

私は沈従文の授業にも出ていた。当時、彼は青島大学で小説について講義をしていたのだ。沈従文は私を気に入っており、彼の妹沈舟舟を通じて、私に毎週 1 篇短篇小説を書くように言い、彼はそれを添削してくれた。彼の妹は私と一緒に住んでいたので、しょっちゅう私に彼らの家に来るように言った。明らかに私の文学的才能は沈従文に強い印象を与えたのだろう、彼が私を招待してくれるのは真面目なものだった。それでも、私は 1 回も行かなかった。私は貧しく、沈家は裕福だったからだ。彼の妹は私の家が貧しいと知っており、私に沈従文のセーターを編ませ、彼らが私に高いお駄賃をくれるように考えたのだが、私は拒否した。

沈従文は当時まだ若手作家に過ぎなかったが、江青が青島時代を回想した 1970 年代には、既に中国現代文学史上欠くべからざる存在の作家であった[15]。当時、沈従文は政治面での紆余曲折ゆえに創作活動から離れていたが、毛沢東・周恩来に小説の執筆を強く勧められていたという背景を知ると[16]、江青が沈従文に関する回想を殊更披歴した理由も想像に難くない。

沈従文の「『幽僻的陳荘』題記」（1935）には「21 年、私はある大学で小説習作を教えていた。最初は 25 人ほどが熱心に受講に来ていたが、後にだんだ

ん少なくなり、1 年後にはわずか 5 人しか残らなかった。5 人のうち 2 人は聴講生である」[17]とある。「21 年」とは民国 21 年、即ち 1932 年を指し、「ある大学」とは国立青島大学を指す。そして、彼の 2 人の聴講生のうちの 1 人が李雲鶴であった。江青自身が語るように、彼女の文学的才能が沈従文の関心を惹いたかどうかは不明だが、前掲の引用と併せても李雲鶴が文学創作に熱心であったことは間違いなく、「青島大学での 2 年間、私は小説と詩歌が大好きになり、また翻訳された外国の詩歌も好きだった。広く外国の古代詩歌をたくさん読んだものだ。当時私は若く、詩詞を書いたこともあるし、出版を考えもした。散文も書いて、発表したものもある」という江青の回想はあながち誇張でもない。実際、李雲鶴は 1934 年から「張淑貞」もしくは「淑貞」の筆名で短篇小説を何編か発表してもいる[18]。

向上心に満ち溢れた李雲鶴の前に、兪啓威（Yu Qiwei、1912-1958。後に黄敬と改名）という青年が現れたのも 1931 年である。兪の名は、江青の回想には直接言及されることはない。青島大学物理学系で学ぶ、品行方正且つ優秀な青年であった兪啓威は、清末の官僚を祖父に持ち、曽国藩の孫娘を祖母に持つ名家の出身で、共産党の地下組織でも活動し、大学では愛国青年団を組織する学生リーダーでもあった。兪啓威の姉兪珊（Yu Shan、1908-1968）は青島大学教務長趙太侔の妻であり、南京の金陵大学卒業後、上海の演劇界で活躍していたスター女優である。そもそも趙太侔を頼って青島に来た李雲鶴は、趙の家をたびたび訪れており、女優になりたいという夢があったために兪珊に憧れ、兪珊も彼女を可愛がっていた。李雲鶴と兪啓威が知り合う素地はあったのである。李雲鶴は育ちが良く弁も立つインテリ青年に急速に惹かれていき、出自の良さを一種のコンプレックスに感じていたであろう兪啓威は、労働者階級出身の向学心旺盛な美少女に魅力を感じ、2 人はすぐに恋愛関係になった。

1931 年 9 月 18 日、日本の関東軍が満洲の奉天で南満州鉄道の線路を爆破、満州事変の口火を切る。この柳条湖事件以降、中国全土で抗日の嵐が吹き荒れ始め、青島大学の左翼学生達も共産党地下組織の指導の下で愛国抗日活動を展開した。その先頭に立ったのが兪啓威であった。熱心に抗日活動をする

兪啓威は1932年初頭、中国共産党に入党する。李雲鶴も兪啓威の多大な影響を受け、兪を紹介者として入党申請したが、兪と恋愛関係にあることで正式入党は認められなかった。その頃、上海で左翼戯劇家連盟が誕生しており、それに呼応する形で兪啓威を責任者として青島に劇連の青島小組が組織され、青島大学内に海浜劇社が出来た。海浜劇社には李雲鶴も参加し、抗日劇を巡回公演した。

同年夏、兪啓威と李雲鶴は親しい友人達に同棲を公表した。

4. 国立山東大学へ

国立青島大学は開学してわずか2年の間に、学生による全学的な大規模ストライキが3回行われている。一つ目は開学の際、虚偽の学歴で入学した学生が多数発見され、彼らに対する除籍処分が契機となったものである。二つ目が上述の柳条湖事件を発端とした抗日学生運動である。そして三つ目は、1932年春、大学上層部が示した新学則への反発であった。この新学則の発令には、抗日学生運動を封じ込めようという国民政府教育部の思惑が働いていた。学生達は6月、学生自治会を開き、「国立青大の全学生は楊振声校長ならびに趙太侔・梁実秋を認めず駆逐する宣言」を出す。楊振声は校長を辞任し、校長業務は教務長趙太侔が代行した。楊振声が青島を離れると、前後して聞一多、沈従文、梁実秋ら文学者達も青島大学を辞職して青島を後にする。

この年、青島大学は教育学院を停止し、在学生ごと国立中央大学教育学院へと移管している。同時に工学院（土木工学系・機械工程学系）と農学院を済南に増設。又、ほどなくして文学院と理学院を合併して文理学院とした。7月、教育部は国立青島大学の解散を命令し、国立山東大学へと改称することを決定。9月30日、教務長兼校長代理であった趙太侔が正式に国立山東大学校長に任命された。趙太侔は楊振声の掲げた青島大学の建学理念を引き継ぎ、教育・研究面で成果を上げ、国立山東大学は国内有数の一流大学へと成長していった。聞一多らが去り一旦は寂しくなった文学院にも、1934年には劇作家洪深（Hong Shen、1894-1955）が外文系主任、小説家老舎（Laoshe、1899-1966）

が中文系講師、1936 年には小説家台静農（Tai Jingnong、1902-1990）が中文系講師、更にその 10 年後の 1946 年には小説家王統照（Wang Tongzhao、1897-1957）が中文系主任として着任するなど、著名な文学者が教壇に立ち続けた。

一方、李雲鶴は 1933 年、兪啓威の紹介の下に中国共産党に入党。江青はその頃のことを次のように回想している。

> 1933 年、私は中国共産党に加入した。これは私の人生の中の重要事である。私はどうやって共産党に加入したのか。1932 年の後期、人の紹介で党の責任者、当時は青島党組織の書記だった人の知遇を得たのだ。

ここで名を挙げられていない兪啓威は当時、青島地下組織党支部の宣伝委員を任命されていた。李雲鶴は兪啓威の補佐的な仕事をし、充実感を味わっていたが、任務に忙殺される兪との関係はだんだん悪化していく。4 月、兪啓威は国民党によって逮捕投獄された。元々名家の出身であるため、姉兪珊および国民党高官であった叔父の奔走によって、兪はほどなくして出獄するが、その間、李雲鶴は上海へ移っていた。回想では「入党後しばらくして、私は上海へ行った」としか語られていないが、兪啓威が死刑になるかもしれないという知らせがあったため、自らにも累が及ぶことを恐れ、また生活面での支柱を失ったゆえの逃亡であった。それによって、結果として李雲鶴と兪啓威の関係も終わりを告げる。

李雲鶴の上海行きをお膳立てしてくれたのは、趙太侔・兪珊夫妻である。夫妻の友人であり、上海で映画監督をしていた史東山（Shi Dongshan、1902-1955）を、映画界に憧れていた李雲鶴に紹介したのである。それは夫妻にしてみれば、厄介払いのようなものだったかもしれない。兪啓威と李雲鶴の関係は兪一族から大反対されており、姉である兪珊自身も好意的には見ていなかったし、兪啓威の逮捕投獄は大学の教務長としての趙太侔にとっては頭痛の種でもあった。2 人の関係を裂くことで、事態の収束を図ったとも言えるだろう。

李雲鶴は上海で夜学の教師を務めるなどし、一旦北京にも行くが、再び上海に戻り、著名な劇作家田漢（Tian Han、1898-1968）の知遇を得、「藍蘋」の芸名で次第に舞台や映画に出演するようになる。本人が望んだような大スターとまではいかなかったが、1935 年から 37 年までの 3 年間、プロの女優としての経験を積んだ。イプセンの『人形の家』でノラを、オストロフスキーの『大雷雨』でカテリーナを、映画『王老五』でも王老五の妻を演じるなど、主役・準主役級の役もあった[19]。

1937 年 7 月 7 日の盧溝橋事件勃発を受け、上海の舞台・映画関係者が救国活動の一環として次々に延安へ向かい出した。李雲鶴もその流れに乗り、7 月下旬に延安入りする。

顧みるに、1930 年 9 月に国立青島大学が開学し、1932 年 7 月には国立山東大学へと改称。中国史上、「国立青島大学」が存在するのは、わずか 2 年弱に過ぎなかったことになる。この短い期間に、青島大学は前述のように全国的な知名度を得、中国現代高等学校史において、北京大学や清華大学、西南聯合大学などに次いで重要な高等教育研究機関となった。そしてその 2 年のうちの多くは、李雲鶴が有名教授の下で文学に触れ、兪啓威と恋愛をし、演劇活動をし、中国共産党の影響を受けた期間でもあった。江青の語る自分史、それは野心的な少女李雲鶴の物語であるが、その中で国立青島大学は、正規の中高等教育を受けられなかった彼女が学問的にも思想的にも成長し、更には上海映画界へ踏み出す切っ掛けともなった場所として、外すことの出来ない重要な位置を占めていると言える。

5. 結び ——「紅都女皇」江青と国立青島大学

李雲鶴は 1937 年の延安入りの後、「江青」と改名し、ほどなくして毛沢東と出逢い結婚する。本稿ではその時代に関してはこれ以上踏み込むことはしないが、江青のその後については周知の通りである。

文化大革命期、江青は国家主席毛沢東の夫人として、都合の悪い過去を覆い隠さんと自らの過去を知る者を次々に抹殺する。とりわけ、映画・演劇関

係者には犠牲者が多い。代表的な犠牲者としては、文革期に猛烈に批判され投獄の憂き目を見た、中国を代表する映画スター趙丹（Zhao dan、1915-1980）が挙げられる。既述の『人形の家』と『大雷雨』で藍蘋と共演経験のある趙丹は 1936 年 4 月に女優葉露茜（Ye Luqian、1917-1992）と結婚しており、その際、藍蘋と映画評論家唐納（Tang Na、1914-1988）、俳優顧而已（Gu Eryi、1915-1979）と杜小鵑もともに式を挙げ、彼らはその結婚式を「映画スター3組の合同結婚式」としてマスコミに大々的に宣伝したという過去がある。この時の合同結婚式の参加者のうち、顧而已は文革中に自殺に追い込まれ、結婚式の介添人をした鄭君里（Zheng Junli、1911-1969）は文革初期に獄死した。唐納との結婚は、毛沢東夫人としては公にされては困る事実なのである[20]。また、スター女優であった上官雲珠（Shangguan Yunzhu、1920-1968）は自殺、既述の劇作家田漢は獄死するなど、文革中に迫害され死に追いやられた映画・演劇関係者には枚挙に暇がない。江青にとって彼らを葬ることは、自分の不都合な過去を知る者を消すというだけでなく、憧れていた映画スターとしては認めてもらえなかったという復讐の意味もあったであろう。文化大革命について江青を始めとする四人組に全責任を負わせるというやり方は、強引かつ乱暴ではあるが、それでも江青が彼女の過去を知る者や彼女にとって都合の悪い者を次々と抹殺した所業は、醜状暴虐以外の何物でもない。まさに「紅都女皇」である。

では、青島大学関係者はどうであったか。まず、李雲鶴がたびたび家を訪問していたという校長楊振声については、息子楊起が「元々、我が家には写真もあった。父と姉と李雲鶴が一緒に写っているものだ。李雲鶴は父の背後に立っている。文革中、父はその写真をそれ以上保管できず、破り捨ててしまった」[21]と回想している。実際の所、楊振声が亡くなったのは文革よりも 10 年早い 1956 年であるため、楊起の回想における「文革」云々は正しくはない。しかし、毛沢東路線を忠実になぞった反右派闘争（1956）などの極左キャンペーンが中国全土を覆っていたことを受ければ、楊振声が不穏な空気を察して写真を処分したことを想像するのはたやすい。楊起は「1952 年に高等教育機関の整理統合が始まった頃、江青の権力はまだそれほど大きくはな

かった」としながらも、「父が受けた迫害も凄まじいというほどではなく、ただ 60 歳を過ぎて病を抱えた身であるにも関わらず、長春の東北人民大学に異動させられただけであった」と、楊振声の 1952 年の異動の裏にも江青がいたような述べ方をしている。確かに楊振声の経歴や教育史上の功績に鑑みれば、東北人民大学への異動は歴然とした左遷であるとも言える。

楊振声の辞任後、国立山東大学初代校長になった趙太侔は、文革中の 1968 年、迫害に耐えかねて青島の海に投身自殺をした。尤も、これは「自殺」とされているに過ぎず、趙太侔は突き落とされて死んだと遺族は語っている[22]。山東実験劇院での師弟関係、青島大学における仕事や授業聴講の世話、妻の兪珊とその弟兪啓威など、趙太侔と李雲鶴の関係は浅からぬものがあった。江青の「前身」を知っているという、ただそれだけのことが死に値する罪とされたという事実に、文化大革命期がどれほど尋常ならざる時代であったかがわかるだろう。趙の妻兪珊は建国後、趙とは別れていたが、やはり 1968 年に迫害を受け亡くなっている。李雲鶴にとっては重要な存在であった兪啓威は、1949 年に天津市長に任命されるなど要職を歴任し、1958 年に病死しているが、文革期に生きていれば同様の目に遭っただろうことは疑いを容れない。

沈従文は 1940 年代後半に研究職に転じていたが、文革中、激しく批判され、蔵書を全て失い、病身にも関わらず家族から離され、湖北省の幹部学校に 2 年間下放させられた。沈従文は江青の回想では悪い扱いを受けてはいないが、本来であればより多くの創作活動が可能であり、優れた作品が誕生していたであろうことを考えれば、沈もやはり中国の政治キャンペーンによって社会的に殺された作家の 1 人であった。

1 人無事であったのは梁実秋である。青島大学図書館で李雲鶴の上司であった梁は、1949 年に台湾に渡る。台湾師範大学で英語系教授、系主任、文学院長などを務め、1966 年に退職した後はシェイクスピア作品の翻訳に専心した。1981 年 1 月 13 日、台湾の『中央日報』に梁の数え年 80 歳の誕生日を祝う記事が載り、その中に次のような件があった。

現在北平で裁判中の江青について話題が移った。江青はかつて梁氏の部下だったのだ。時は 50 年前、梁氏は青島大学図書館長であり、当時は李雲鶴という名だった江青は、図書館の事務員であった。青島大学の職員名簿によれば、館長の月給は 400 元、江青の月給は 30 元である。（中略）梁実秋はこう語る。「あの頃、江青はしょっちゅう我が家に食事に来ていました。ある時などは、私に 2 角貸してほしいと言うので、すぐに貸してあげましたよ。彼女はお金を借りてチョコレートを買いたかったのです。通りを歩きながらチョコを食べたかったのですね。――その 2 角は後になっても返してもらっていません」。お客達はこう述べた。「あなたは江青の山ほどの秘密を知り過ぎています。もし大陸にいたら、間違いなく家宅捜査を受けていましたよ」[23]

文中の「お客達」は梁実秋の誕生祝いに集った人々を指す。チョコレート代の 2 角を返してもらっていない云々は梁実秋の軽い冗談にしても、もし彼が大陸に残っていたら、家宅捜査どころか、他の作家達同様、確実に迫害を免れ得なかったであろう。梁自身、曾ての仲間達が江青から被った害を知り、自らの幸運を噛みしめたに違いない。酸鼻を極めた文化大革命と江青について話題になった時、江青にチョコレート代を貸したという微笑ましいエピソードを挙げて、場を和ませる以外なかったのかもしれない。李雲鶴が李雲鶴のままであったら、梁実秋が台湾に渡った後に彼女に言及し、それが新聞紙上で文字化されることもなかっただろう。

李雲鶴、変じて江青が、中国全土及び中国史上に及ぼした影響は計り知れない。本稿では、少女李雲鶴と国立青島大学及びその教授陣との関係や影響のみを見た。では「国立青島大学」は、歴史上から完全に姿を消してしまったのだろうか。

国立青島大学の初代校長にして、結果としては最後の校長ともなった楊振声は、前述の通り青島大学開学の際に青島大学を「海洋生物学研究の中心となるであろう」と予言した。国立青島大学から国立山東大学へと改称した後、1946 年に農学院に新たに水産学系が設置される。翌年には水産学系は農学院から理学院に改設されるが、1959 年に独立して山東海洋学院となる。翌 60 年、山東海洋学院は国家教育部が指定した 13 校の全国重点総合大学に選ばれ[24]、1980

年には青島海洋大学へと改称し、更には2002年に中国海洋大学へと改称する。現在、中国海洋大学は海洋学の国内最大の研究拠点になっている[25]。国立青島大学は早々に歴史上からその名を消したが、楊振声が開学の際に掲げた理念は今尚受け継がれていると言って良いだろう。

---

[1] 王統照「青島素描」（1934年3月19日執筆、初出は『青紗帳』生活書店 1936年10月。楊洪承主編『王統照全集』中国工人出版社 2009年4月）に「“青い山、紺碧の海、紅い瓦、緑の木々”。康有為が青島の色彩を評したこの八句は、一般の旅行者の記憶に留まって既に久しい」とある。康有為が初めて青島を訪れたのは1917年冬のことであり（「南海康先生年譜続編」（楼宇烈整理『康南海自編年譜』〔康有為学術著作選〕中華書局 1992年9月）、それからわずか17年ほどで「青い山―」の八句が人口に膾炙したことは、康有為の言であるかどうかと無関係に、簡にして見事な表現が受け入れられていたからに他ならない。また、「紅瓦緑樹、碧海藍天」のバージョンもある。

[2] 李白「寄王屋山人孟大融」（754）、藍田「嶗山巨峰白雲洞記」など。

[3] 『明史』第四冊、明史巻四十一志第十七地理二（清・張廷玉等撰、中華書局 1974年4月）の「即墨」に「又、東北に雄崖守禦千戸所有り、南に浮山守禦千戸所有り、倶に洪武中に置く。」とある。「即墨」は現在の青島市一帯を指す。

[4] 王桂雲・魯海主編『山東地方史志縦横談』（吉林省地方志編纂委員会・吉林省図書館学会出版 1985年3月）は、明の万暦6（1578）年に即墨知県に任ぜられた許鋐が『地方事宜議・海防』の中で「青島」という語を用いたのが、書籍中に初めて見出せる「青島」の例であると指摘している。

[5] ドイツが清国から青島を租借したのは1898年3月であるが、前年11月1日の山東省巨野県におけるドイツ人宣教師殺害事件を口実に、11月14日にはドイツ軍が膠州湾に上陸し、清国軍を撤退させていたために、ドイツによる青島支配は1897年からとする記述が多い。

[6] 青島守備軍民政署編『新刊青嶋要覧』新極東社出版部、大正10年11月、泉對信之助著『青島二年』東海堂書店、大正11年6月。

[7] 楊振声については宮尾正樹「楊振声と『玉君』」(『お茶の水女子大学中国文学会報』第 7 号、1988 年 4 月)、拙論「楊振声「抛錨」・石華父『海葬』・柯霊『海誓』をめぐって――恋愛と復讐の変奏」(『お茶の水女子大学中国文学会報』第 32 号、2013 年 4 月)、「楊振声「搶親」・「報復」と民国期中国の強奪婚――少女は語らない」(『言語文化論叢』(金沢大学外国語教育研究センター紀要)第 18 号、2014 年 3 月)、「楊振声と「五四」　楊振声の「五四」」(『野草』(中国文芸研究会機関誌)第 94 号、2014 年 8 月)に詳しい。

[8] 王桂雲著『青島近代名人逸事』新華出版社 2007 年 10 月、欒玉璽「青島の工業化と近代教育」(関西学院大学『経済学研究』第 32 号、2001 年)などを参照。なお、上海同済大学は元ドイツ海軍軍医で医学博士エーリッヒ・パウルン(Erich Hermann Paulun、1862-1909)が 1907 年に創立した同済医学堂を前身とした私立大学。1927 年には国立大学となった。

[9] 梁実秋著『談聞一多』伝記文学雑誌社、中華民国 56(1967)年。

[10] 『国立青島大学週刊』1931 年 5 月 4 日。この 5 月 4 日という日付は、1919 年 5 月 4 日の五四運動を受けていると見て間違いないだろう。楊振声は五四運動の精神を重視していた。注 7 前掲拙論「楊振声と「五四」　楊振声の「五四」」に詳しい。

[11] 青島における高等教育機関設立の歴史及び国立青島大学の設立に関しては、国立青島大学編『中華民国二十年度国立青島大学一覧』1931 年(大阪教育大学准教授・中野知洋先生のご提供による)、劉増人・王煥良主編『青島高等教育史(現代巻)』人民出版社 2008 年、注 8 欒玉璽論文、金以林著『近代中国大学研究』中央文献出版社 2000 年 2 月、季培剛編著『楊振声編年事輯初稿』黄河出版社 2007 年を参考にした。

[12] 江青についての記述は主として、江青口述・常笑石整理『江青自伝』北運河出版社 2012 年 2 月、R.特里爾著・劉路新訳『江青全伝』河北人民出版社 2003 年 11 月、葉永烈著『江青伝』作家出版社 1993 年 12 月、伊原吉之助「江青の最初の人生」(『帝塚山大学論集』第 11 号、1976 年 3 月)、「上海時代の江青」(『帝塚山大学論集』第 12 号、1976 年 5 月)、「江青:上海から延安へ――江青評伝稿(三)」

（『帝塚山大学論集』第 14 号、1977 年 4 月）に基づいた。また、ロクサーヌ・ウィトケ著、中嶋嶺雄・宇佐美滋訳『江青』上下、パシフィカ 1977 年 8 月も参考にした。

[13] 注 12 前掲江青自伝。以下、江青の談話は全て本書に拠り拙訳を付す。

[14] 楊起口述・陳遠筆録「楊振声：湮没無聞許多年」（陳遠著『在不美的年代裡——陳遠口述史系列』重慶出版社、2011 年。初出は『新京報』2004 年 8 月 21 日）。

[15] 沈従文「写在『紅都女皇』摘録文字下」の注釈に、沈従文の甥である田紀倫が沈従文に「江青は伯父さんが国内外で声望が高いことを知っていて、だからウィトケに対してわざわざ自己宣伝に努め、伯父さんに文学を指導してもらったなんて言ってるんですよ」という書信を送った旨の記述がある。『沈従文全集』第 14 巻・雑文、北岳文芸出版社 2002 年参照。

[16] 1953 年 9 月 23 日から 10 月 6 日、第二次全国文学芸術工作者会議が開催された。工芸美術界の代表として出席していた沈従文に、毛沢東・周恩来の二人が小説執筆を励行したという。小島久代「沈従文と作品についての解説」（沈従文著・小島久代訳『辺境から訪れる愛の物語——沈従文小説選』勉誠出版 2013 年）参照。

[17] 沈従文「『幽僻的陳荘』題記」（『沈従文文集』第 11 巻・文論、生活・読書・新知三聯書店香港分店、花城出版社 1985 年）。文中の聴講生のもう 1 人は、『幽僻的陳荘』の作者であり、学生ストライキを発動したことで青島大学を除籍処分となった王林（Wang Lin、1909-1984）である。

[18] 「宝宝的爸爸」（『新社会』半月刊第 7 巻第 3 期、1934 年 8 月）、「王秘書的病」（『新社会』半月刊第 7 巻第 4 期、1934 年 8 月）、「催命符」（『新社会』半月刊第 7 巻第 6 期、1934 年 9 月）など。これらの作品は「張淑貞」という筆名で発表された。

[19] 『人形の家』は上海業余劇人協会第 1 回公演、1935 年 6 月 27 日から上海の金城大劇院にて 2 か月上演。演出は章泯。『大雷雨』は上海業余劇人協会第 3 回公演、1936 年 11 月より上海卡爾登大戯院にて上演。演出は章泯。映画『王老五』は 1938 年 4 月から上海の新光大戯院にて公開。脚本・監督は蔡楚生。

[20] 江青の結婚は 2 で述べたように、唐納とのものが初めてではない。済南での最初の結婚相手は裴明倫。また、兪啓威との同棲も周囲からは結婚同然に目されていたし、上海時代、『人形の家』と『大雷雨』の演出家であった章泯との愛人関係は有名であった。

[21] 同注 14。

[22] 同注 14 前掲文に拠る。

[23] 「壽比梅花健　春從臘鼓來――梁實秋先生今度八秩華誕」(『中央日報』中華民国 70（1981）年 1 月 13 日、第 4 版)。

[24] この時、国家教育部が公布した「全国重点総合大学」13 校とは、中国人民大学、北京大学、復旦大学、中国科学技術大学、南開大学、南京大学、武漢大学、中山大学、四川大学、山東大学、山東海洋学院、蘭州大学である。

[25] 「山東大学水産系的創建」、山東大学新聞網 HP 中の「校史一頁」参照。http://www.view.sdu.edu.cn/new/2013/0411/50195.html、2015 年 11 月 12 日閲覧。

【附記】

本稿は学術研究助成基金助成金の交付を受けた基盤研究（C）「文化都市・青島における知識人ネットワークと都市表象の研究」（課題番号：15K02431、研究代表者：富山大学・齊藤大紀）による研究成果の一部である。